

「クリスチャン」という呼び名について

日本では一般に「キリスト者」あるいは「クリスチャン」と言われますが、原語のギリシャ語では「クリスティアノス」と記されています。

[キリスト]はギリシャ語では「クリストス」といいます。

これにラテン語の「イアン」をつけて、ギリシャ語の語尾の「オス」をつけて「クリスティアノス」と呼んだのです。ややこしい複合語ですが、ギリシャとラテン（ローマ）文化が混合したヘレニズムの世界ですから、こういう言葉が生まれたのでしょう。

さてこの「クリスティアノス（クリスチャン）」とは、通常、キリストに従う者、キリストにつく者、キリストのために身命を投げ打つ者、などの意味であるという解説が一般的です。しかし今一度改めてこの呼び名が当時の人々にどのように受け止められていたかを聖書から考察してみたいと思います。

先ずペテロの第一の手紙 4:16 に、注目しますと、このように記されています。「しかし、キリスト者[クリスティアノス]として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。」「クリスティアノス」と言う語句は、聖書中にわずか3回しか使われていません。

先ずその2つを引用しておきましょう。

「このアンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者[クリスティアノス]と呼ばれるようになったのである。」(使徒 11：26)

「するとアグリッパはパウロに、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者[クリスティアノス]にしようとしている。と言った。」(使徒 26：28)

「しかし、キリスト者[クリスティアノス]として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。」

(ペテロ 4：16)

先ずペテロの第一の手紙 4:16 に、注目しますと、「キリスト者として苦しみを受ける」という表現がありますが、原文には「苦しみ、受難」といった意味の語句はありません。

下にギリシャ語と対応する単語の日本語を逐語訳風に配置してみました。

εἰ	δὲ	ὡς	Χριστιανός,	μὴ	αἰσχυνέσθω,	δοξαζέτω	δὲ	τὸν
もし	そして	様に	クリスティアン、無い	辱められる	崇める	も	その	
Θεὸν	ἐν	τῷ	ὀνόματι	τούτῳ.				
神を	中で	the	名前	その。				

主要な意味を持つ語句は「クリスチャン、辱められない、神 栄光、その名前」であり、字義的に訳すと次のようになります。

「クリスチャンとして辱められるな。(むしろ) その名によって神を崇めなさい」

それで「クリスチャン」という名で呼ばれることと「恥」という概念が、理由も示されず当然のごとく、結びつけられています。

これは明らかに「クリスティアノス」という響きの中に、それを侮蔑的と感じ取るものがあつたと言うことは確かだと言えます。

このことは、一般に言われているように、当初「クリスチャン」という呼び名は軽蔑的な仕方使われていたという解説の根拠となっているものと思われま

それで、ここでペテロは、クリスチャンと呼ばれることで、恥じたり、無視したりするのではなく、キリストの弟子としてとしての特質を発揮することによって、神を栄光ある者とす

つまり、この助言は、この聖句の少し前の方の 2 章で記しているのと基本的に同じ助言の繰り返しと捉えて良いでしょう。

「異教徒の間で立派に生活しなさい。そうすれば、彼らはあなたがたを悪人呼ばわりしてはいても、あなたがたの立派な行いをよく見て、訪れの日に神をあがめるようになります。」
(ペテロ I 2:12)

当時の大半の人々にとってのキリストの弟子に対するイメージは好まれるものではなく、そうした人々から「クリスチャン」の名で呼ばれる事は、「悪人呼ばわり」と大差なかったと言う事なのでしょう。

当時の造語である「クリスティアノス」という呼び名は周りの異教徒から付けられた、いわば「あだ名」のようなものです。そのあだ名で呼ばれることをキリストの名のための苦しみとして受け止め、むしろその機会を利用して神への賛美を増し加えるチャンスにすると言う積極的な精神がうかがえます。

しかしその付けられたあだ名の意味あいとしては、平たく表現すれば「キリストかぶれ」「キリスト野郎」現代日本語風に言えば「キリストおたく」という風なニュアンスを持つあだ名だったと思って良いでしょう。

ペテロの第一の手紙が書かれたのは西暦60年の前半くらいですが、それまでに、異邦人から「クリスチャン」と呼ばれることが一般化していたことに対してペテロは、敢えて異論を

唱えず、卑屈にならず、雄々しくあるべきと励ましていますが、しかし、「クリスティアノス」という語句が、聖書中にたった三度しか用いられていない、しかも、そう表現したのは、「アンティオケアの人」「アグリッパ王」「異邦人たち」の3例だけです。

このことを事を考えますと、明らかに、「甘んじて受け入れた」に過ぎず、喜んで自分たちの名称として採用したわけではないことがうかがえます。

聖書を記した人の誰1人として、自分を「クリスチャン」とは呼んでいませんし、またそのようにした弟子についても何もふれていません。

明らかに、自ら好んで、あるいは、神からの配慮として相応しい呼び名が与えられたと考えていたなら、それは彼らの習慣になっていたはずであり、少なくともそうした記述が一、二例はあっても良いはずです。

1世紀の弟子たちが、自分たちを「クリスチャン」と呼ばなかったのは、当然と言えば全く当然で、異邦人から呼ばれることを堪え忍ぶことと、自らがそれを採用することとは、明らかに問題が異なります。

もし自らそれを採用するなら、異邦人と同じ、キリストに対する侮蔑的な精神を現すことになったでしょう。

ここで、だから、神とキリストに畏敬の念を抱くキリストの真の弟子であろうとしている人は、自らを、また互いを「クリスチャン」と呼ぶべきではない。と言おうとしている訳ではありません。

今日、その名に侮辱的な意味があると考える人はほとんどいないからです。

多くのもの、習慣、イメージ、価値観などは時代と共に変節してゆくものだと言うことです。

もし1世紀当時の弟子たちが「敬虔なクリスチャン」などと言う表現を耳にしたら、余りの意味不明さに困惑の極みに達するでしょう。

同様に、「クリスティアノス」に限らず他にも、今日「キリスト教」として知られる多くの習慣や行事、信仰、神学などのあるものを、1世紀当時の弟子たちが見聞きしたら、理解不能、大驚失色する人が続出することもあり得るかも知れないという事を覚えておきたいと思います。